PROJECT

プラント・マテリアル ——その外見的変化と意味的変容

文・写真
落合雪野

共同研究 ● プラント・マテリアルをめぐる価値づけと関係性（2009-2012）

ジュズダマを衣服に縫いとめるアカ女性（2008年1月、ラオス、ルアンナムター県）。

「プラント・マテリアル（plant material）」とは、わたしたちが共同研究を始めるにあたって創作したことばで、植物に由来する種々のモノを指している。このプラント・マテリアルについて、東南アジア大陸部山地でフィールドワークを展開してきた共同研究員が、モノからも人からも検討する場が、共同研究「プラント・マテリアルをめぐる価値づけと関係性」である。本稿では、この共同研究について、目的や設定、これまでの経過について紹介したい。

目的

人びとは生活や生業の中で、植物を素材にさまざまなモノをつくり、所有し、交換し、消費してきた。この一連のプロセスの中で、モノのかたちが物理的な変化をとげると同時に、モノのもつ用途や目的、さらには価値基準までもが変化していく。この変化のありさまを注意深く観察すると、つぎのような問いが浮かび上がってくる。

生態系に数多く存在する植物の中から、いかにして「対象」となる植物が選択され、素材となってこのプロセスが始まるのか。そのプロセスが進行していくなかで、「主体」となる民族集団は素材に対していかなる加工や介入をおこない、どのようなモノがかたちづくられるのか。誰が、どんなモノに対して、どのような価値を与えているのか。モノをめぐるプロセスの背後には、いかなる主体間の相互認識や役割分担があるのか。

このような問いをもとに、本研究では、プラント・マテリアルに対してその外見的変化と意味的変容の両面に着目し、検討する。そして、対象と主体がせめぎあう境界面における相互作用の結果としてモノをとらえることにより、空間的時間的広がりの中で変化していく価値づけという行為と主体間の関係性を明らかにする。これが本研究の目的である。

設定

共同研究の対象地域は、ミャンマー、タイ、ラオス、ベトナム、中国雲南省が国境を接する東南アジア大陸部山地である。この地域ではさまざまな目的のために植物が利用され、民族集団間、民族集団内でやりとりされてきた歴史的経緯がある。香木のジンコウジュやアンソクコウノキなどは、その典型的な例である。さらに近年では、市場経済の発展にともなって中規模グローバル圏のような様相を呈しており、やりとりされる植物の種類や量の拡大が続いている。つまり、東南アジア大陸部山地は、自然環境と人間の活動を関連づけながらプラント・マテリアルについて検討するうえで、もっとも興味深い地域なのである。

共同研究員は17名である。植物分類学、生態学、農学などの自然科学系の領域で、植物そのものや植物を生み出す源泉となる生態系について解明を試みてきた研究者7名と、文化人類学、歴史学、地理学などの人文科学系の領域で、植物をモノに変換する主体となる民族集団について研究をおこなってきた研究者10名が含まれる。プラント・マテリアルの価値づけのプロセスにおいては、植物の生物種としての特徴が人びとの行動を規定すると同時に、人びとがおかれている社会的文化的状況が植物の選択や分布に影響する。共同研究員は、

市場で売られる発酵茶（2010年2月、タイ、チェンマイ県）。

自身の研究関心をもとに特定のモノを対象として報告をおこなうと同時に、植物と人について包括的な検討をおこなう。

さらに、報告に関連して、プラント・マテリアルの実物資料を積極的に参照する予定である。これには、共同研究員の個人コレクションだけでなく、国立民族学博物館、鹿児島大学総合研究博物館、高知県立牧野植物園などの収蔵資料についても活用することを考えている。

経過

本共同研究では2010年7月現在、3回の研究会を実施した。第1回研究会（2009年12月26日）では、代表者が問題提起と趣旨説明をしたあと、共同研究員全員が報告を予定する内容について説明し、研究会の方向性について討論した。

その結果、つぎのような報告をおこなうこととなった。共同研究員の氏名（とりあげるプラント・マテリアルあるいは生活の場面：動詞で表記した事象）の形で紹介する。綾部真雄（アサなど民族衣装の素材：売る）、飯島明子（カジノキ紙：記す・伝える）、落合雪野（ジュズダマ：つくる・売る）、樫永真佐夫（年代記にあらわれる植物：伝える）、加藤真（昆虫と植物の相互関係:共生する）、神崎護（森林:はぐくむ）、佐々木綾子（チャ:たしなむ・飲む・保存する）、白川千尋（蚊帳：住まう）、高井康弘（スイギュウ、家畜を通しての植物利用：飼う）、田中伸幸（ミャンマーの植物相、ラン:食べる・着る・癒す）、クリスチャン・ダニエルス（ビンロウ：たしなむ、シュロ：加工する）、馬場雄司（竹の楽器：奏でる・癒す）、速水洋子（農作物の種子：運ぶ・つなぐ）、土佐桂子（民間医療：癒す、タナカー：装う）、松田正彦（たばこ:たしなむ）、柳澤雅之（土地:所有する・ころがす）、横山智（ナットウ：食べる・保存する）。

第2回研究会（2010年2月20日）では、横山智が「東南アジア大陸部山地におけるナットウの分布とその特徴」、佐々木綾子が「発酵茶から飲料茶へ――チャをめぐる価値づけの変化」と題した報告をおこなった。

横山は、タイ、ラオス、ミャンマーでの現地調査や実験をもとに、「トゥア・ナオ」や「ペポ」などの無塩発酵大豆食品について、製法や利用方法を比較分析した。佐々木は、タイ北部での現地調査をもとに、発酵茶「ミアン」と飲用茶をとりあげ、生業や文化的位置づけの変化について報告した。ふたりがとりあげたダイズ（*Glycine max*）とチャ（*Camelia sinensis*）は、ともに東南アジアで広域的に利用される栽培植物である。この原料に発酵という加工処理をすることにより、発酵茶やナットウのような特色ある産物がつくられる。その目的はたんに保存するだけでなく、独特の味や香りをつけることにあり、そこに生じる微妙な違いが産物としての価値を左右することになる。共同研究員がフィールドワークで実際に口にすることの多いプラント・マテリアルだったこともあり、報告に続く討論は活発なものとなった。加工技術の差異、技術や産物の伝播や拡散、担い手となる民族集団、商品としての評価などの論点について、質問が寄せられた。

第3回研究会（2010年6月5、6日）では、まず、特別講師の加藤高志（名古屋大学）が「東南アジア大陸部における言語集団：タイ文化圏を中心に」のタイトルで報告をおこなった。東南アジア大陸部山地に居住する民族集団は複雑なグループわけがされているが、この発表によって、言語を手がかりにその全体像と個々の単位を把握する視点を確認することができ

ツァイワ女性のつくったナットウ（2009年8月、ミャンマー、カチン州）。

た。続いて、落合雪野が「ジュズダマをめぐるハンディクラフト・ビジネスのゆくえ」、樫永真佐夫が「黒タイ年代記資料にあらわれるプラント・マテリアル」と題した報告をおこなった。

落合はタイ、ラオス、ミャンマーでの現地調査や実物資料コレクションの分析をもとに、イネ科ジュズダマ属植物（*Coix*）の種子を素材につくられる民族衣装やハンディクラフトの変化について、アカとカレンの事例を中心に報告した。続く討論では、観光化にともなうみやげもの販売の拡大や種子のパーツ化現象、あるいは自然素材に対する他者評価などについてコメントが寄せられた。この報告でとりあげられたプラント・マテリアルの商品化とそれにともなう価値づけの変容は、今後の報告でも重要な論点となると思われる。いっぽう樫永は、ベトナム西北地方の黒タイに伝わる年代記に記されたプラント・マテリアルについて分析し、歴史や文化をめぐる自己認識や生態環境のかかわりについて考察した。樫永のあつかうプラント・マテリアルはもともと文字情報の状態にあったわけだが、報告と討論の中で、フィールドワークでの綿密な観察とほかの共同研究者のコメントを結びつけることにより、実態としての植物種やその植物学的な情報、あるいは生活のなかでの位置づけが明確になっていった。

本研究は緒についたばかりであり、終了予定時の2012年度まで、さらなる報告や討論を積み重ねていくことになる。具体的なモノを手がかりに植物と人の相互作用、またその表われとしての生活世界を実証的に記述しつつ、最終的に、1）モノについて、固定した意味や価値をもつ存在という既存のイメージを相対化し、マテリアル・カルチャー研究における新たな視座を見出すこと、2）東南アジア大陸部山地の多言語多民族社会について、具体的なモノを手がかりにその全体像を俯瞰的にとらえる研究の切り口を確立することを、実現させたい。

おちあい ゆきの

鹿児島大学総合研究博物館准教授。専門分野は民族植物学、東南アジア地域研究。著書に『アオバナと青花紙』（阪本寧男と共著 サンライズ出版 1998年）や『ラオス農山村地域研究』（横山智と共編著 めこん 2008年）など。